# グループワークを中心とするプログラムにおけるグループづくりの相互作用分析：

## 「矯正教育プログラム（薬物非行）」の質的分析（２）

○成城大学　　南　保輔
四天王寺大学　平井秀幸

### １　目的

自助グループやピアサポートにおいては，当事者同士が「同じ」経験や問題を共有しており，わかり合えるということがその有効性の鍵のひとつと考えられる。Ｘ女子少年院における「矯正教育プログラム（薬物非行）」のフィールド調査記録をもとに，受講少年たちのグループづくりの諸側面を明らかにする。具体的には，考えをうまく伝えられないひとに変わって述べること（代弁）を行ったり，薬物使用経験がないなかで指導者は自分たちの話をどれだけ理解できるかを見極めたり，親も薬物依存であるのは自分だけと思い込んでいるという悩みを打ち明けたりしていた。

### ２　方法

12 週にわたって実施されたプログラムにおいて，ミーティングとグループワークなどの「授業」が毎週教室で行われた。そのヴィデオ録画と，受講少年と指導教官に対するインタヴュー録音を収集した。トランスクリプトを作成し，そのうち４週までのものについて相互作用分析を行った。

### ３　結果

受講少年と教官との初回ミーティングでは，断薬に何度も失敗してきた経験から，プログラムの効果に期待したいがそう明言できない少年がいた。この少年Ｅが教官に気持ちをうまく伝えられないでいると，ほかの少年Ｂが代弁するように発言した。代弁された少年Ｅは，代弁するＢのことばに力強く何度もうなずくとともに，Ｂの発言が終わったところでは，教官にたいしてじっと顔を向けていた。あたかも，「いまＢが述べたのがわたしの言いたかったことだが，それが薬物経験のない教官にうまく伝わっただろうか」というかのように。少年Ｂは，ミーティングの終わりに，共感ができて良かったと述べた。代弁した，代弁してもらったという経験を通じて，代弁したＢと代弁されたＥは共に，グループに居心地の良さを感じたと推測される。

グループワークには，外部専門家として，アルコール依存者の指導経験が豊富な臨床心理士が参加した。これによって，薬物使用経験の有無という対比軸に加え，薬物使用経験が無い者のあいだに依存問題の指導経験の有無という対比軸が加わった。少年たちは，発言の終わりに「わかりますか」と問いかけることが見られたが，教官の「わかる」と臨床心理士の「わかる」に，差異を見いだしているようだった。

少年Ａは，親が薬物依存であり被虐待経験がある。自身の薬物使用は「親への復讐」であると発言した。親が薬物使用者だったのはほかには１人だけだったが，それ以外の少年も親との関係に問題があり，それが自身の薬物使用につながっていると感じていた。Ａは，親が薬物依存であるのは自分だけであろうと考えて，このことを開示すべきかどうか迷っていた。親との関係で問題をかかえているのが自分だけではないと知り，プログラムに積極的に取り組むようになった。

### ４　結論

プログラムが成功するためには，受講少年が積極的に自己の経験を開示していくことが不可欠である。同じ問題，経験をした少年を集めるために，Ｘ女子少年院では移送・還送が行われている。これにはデメリットもあるが，グループづくりがうまくいけば，それを上回る効果をもたらすものと思われる。

### 文　献

平井 秀幸；南 保輔．2014．「矯正教育プログラム（薬物非行）」の質的分析に向けて：導入の背景とプログラム実施例の概要．『コミュニケーション紀要』25：1-29.